

二葉亭四迷全集

第三卷

昭和三十九年十一月二十六日 第一刷発行 ©

創作・翻譯三

定価四〇〇円

著者

二葉亭四迷

東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
発行者 岩波雄二郎

東京都板橋区板橋町六丁目三二八九番地
印刷者 白井知一

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋二丁目三番地

株式会社

岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

つゝを枕(トルストイ).....	三
四日間(ガルシン).....	四五
猶太人の浮世(ゴーリキイ).....	六一
ふさぎの蟲(ゴーリキイ).....	一〇三
根無し草(ガルシン).....	一六七
小按摩.....	一七五
灰色人(ゴーリキイ).....	一八一

むかしの人（ゴーゴリ）	一八七
はきちがへ	二二三
其面影	二二三
「ふさぎの蟲」「其面影」の反響	三六三
解説	四一五

つゝを枕

(トルストイ)

千八百五十何年の冬の中頃、我砲隊の一部隊は分遣隊中に加はつてバリシャーヤ、チェチナに滞陣してゐた。二月十四日の夕暮、將校不足の爲め自分が隊長心得を命ぜられてゐた小隊は、翌日林木伐採の任務を帯びることとなつたので、いろ／＼必要の命令を受けて、其を兵にも傳へてから、例よりは早く天幕へ歸つて來た。炭火に天幕の内を煖ためるなどいふ惡習には染むでゐなかつたから、服をも脱がず杙を力に設けた臥處へごろ臥をして、毛裏の外套にくるまり毛皮帽に額まで埋めて眠に就いた。グッスリ寢込みはしたが、將に死地を踏まむとする身の、胸のみ騒がれて心落居ず、夢さへ穩かならずして、如何にしても明月の戰爭が氣に成つてならぬのであつた。

まだ物の銕色も分かぬ午前三時といふに、誰やらに溫もつた外套を剥がれると、蠟燭の赤々とした火が睡老眼を射す其心地わるさ！

「もうお起きになりませ。」といふ聲がする、自分は開いた眼をまた瞑つて、剥がれた外套をうつ／＼に引被つて、うと／＼となると、從卒のドミートリーが肩を用捨もなく揺ぶりながら、「ほんにもうお起きになりませ。歩兵の方はもう出懸けさうであります。」ふつと氣が附いて、愕然して跳起きて、匆々に冷水で顔を洗ひ、一椀の茶を喫すると其儘、天幕を出て砲車を据ゑた處へ行つた。まだ薄暗く、朝霧は深く立罩めて、冷々としてゐる。陣地の彼處此處に宵から焚徹した篝火は四圍に臥したる兵の姿を照して、唯赤々と見えるのみで光は薄く、いと／＼闇いのが益々闇く思はれる。間近には穩かな落着いた鼾が聞え、彼方には進發の準備をしてゐる歩兵の話聲やら、物に觸れて銃の鳴る音やらがして、混雜してゐる。烟、馬糞、火繩の匂が鼻を撲つて、身に浸みる朝寒に、我慢にも齒の根が合はぬ。

暗くて一寸先も分らぬけれど、馬の鼻嵐と折々聞える蹄の音で既に馬を服けた砲車彈藥箱の在處も知れ、

點と見える火繩の光に砲の所在も纔に其處と目宛が付く。進發々々といふ聲と共に、一番砲ががた／＼と鳴り出し、續いて彈藥車も搖出して、全小隊が動く。皆一様に脱帽して、胸で十字を描き、さて歩兵と歩兵との間に割込んで、約そ物の二十分も全縦列の集合して司令官の出で来るのを待つてゐた。

「兵が一人見えませんがな。」といひながら側へ来る黒い影を、纔に聲で隊の砲手長のマクシーモフと判じて、

「誰が？」

「ウェレンチウクが見えません。馬を服ける時分にや、確かに居つたです、私が現に見たです、それなのに今見ると、居らんのであります。」

まだ進發には間が有りげに見えるから、伍長のアントーノフを探しに遣つた。間もなく暗中に馬を躍らし、幾人か側を駆通る者がある。これは司令官の一行であつた。頓で全隊が動揺いて、まづ先鋒隊が繰出し、續いて我隊も進行を始めたが、アントーノフとウェレ

ンチウクの姿が見えぬ、が、百歩ばかりすると、二人共追蒐けて來た。

「何處に居つたか？」とアントーノフに問けば、

「砲廠で眠てをつたのであります。」

「何だ、酔ばらつてゐるのか？」

「さうぢやありません。」

「ぢや、如何して眠てゐたんだ？」

「如何してゐありますか。」

雪のむら消えた荒野を横さまに、闇く森とした中を、砲車の輪に矮い灌木を壓折り／＼、物の三時間も進行して、頓で浅い恐ろしく瀬の早い小川を渡ると、進行が止まつて、先鋒隊の方で小銃の音がバチ／＼と聞える。之を聞くといつも全隊の士氣が妙に振起つのであるが、此時も皆眼の覺めたやうになつて、彼方此方に話聲が起り笑聲が聞え、一體に動揺めき立つた。兵の中には、或は相撲を始める者もあれば、たゞ足踏をする者もある、或はビスケットを噛る者、又は退屈紛れに銃を執つて捧げたり立てたり操練の眞似をする者

もある。去程に東の空は著しく白み出して、空氣はけしからず濕つき、四圍の物も次第に暗黒を離れて、もう青い砲架や彈藥箱、朝露に濡れた大砲、何時ともなく微細しい點まで眼に慣れた隊の兵や栗毛の馬の姿、煌々とした銃劍を裝け、兵糧囊に銃拂に小鏝を引背負つた歩兵の隊伍も見えるやうになつた。

程なく又進行を續けて道もない所を押して行くこと數百歩にして、其所に陣を取つた。右の方には蜿蜒と屈曲つた斷岸の小川を隔て、韃靼人の墓標らしい長い杭が見え、左の方から前面へかけて朝霧を透かして一帯の地が黒々と見渡される。我隊はまづ馬を外し、我を掩護する任務を帯びてゐる歩兵の第八小隊も銃を組む。そこで一大隊ほどの兵が銃と斧とを把つて林の中へ進み入つた。

五分と經たぬ内に、もう彼處此處に篝火を焚く音がピシ／＼として、煙が捲揚る。兵は列を崩して、或は手足で薪をせしめる者もあれば、または木株枯枝などを運んで來る者もある。丁々たる數百の斧の音、ばたり

／＼と木の倒れる音が絶えず林中に響渡る。

砲兵は幾分か歩兵に競争の氣味で篝火を焚いて、もう二歩と間を置かねば近寄れぬ程熾に燃してゐた。雪の凍着いた枝を彌が上に積累ねた隙間から、濃い黒煙が吹出し、點滴は火中へ滴つてジワ／＼と沸える其下に炭にも紛がふ燒指が出来て、四圍の草は火氣に白く枯れて了つてゐるけれども、兵等は之をも飽足ずとして、伐木を運び、焚草を押込むで、愈益盛に燃立てる。

自分が煙草を吸付けようと篝火の側へ立寄ると、日頃おせつかいのウェレンチウクは今日は失敗があるので、人一倍ちよこまかと其處らで骨を折つてゐたのであつたが、熱心が嵩じた時とて、素手で篝火の中の火を一つ摘出して、二度ほど手から手へ移して、礫と取落した。と見て一人の兵が、「枝へ火を附けて上げい。」と云ふと、今一人が、「それよか誰ぞ其處の火繩を取つて上げろ。」といふ。

ウェレンチウクはまたしても火を摘みさうにしたけれど、自分が獨で紙巻を吸付けて了つたので、彼は

火傷した方の手を半外套の裾で擦つてゐたが、何か手持無沙汰の氣味で大きな木の片を拾上げ、機を打たせて鐐の中へ投込んだ。而して是でやうやく役が濟みましたと云ひさうに近々と火に寄つて、外套の胸を開け足を踏張つて、色黒の太い手を火に繋し、少し口元を歪めて、眼を細くしてまじり／＼してゐたのであつたが、頓て誰に向ふでもなく、「チョツ失敗た！パイプを忘れて來た。いかん事をしたなア！」

二

露西亞の兵は性質上三種に大別することが出来る。高加索兵でも、各軍團の兵でも、近衛兵でも、乃至歩騎砲工孰の科の兵でも、此三種の孰れかに嵌まる。

三種といふのは、

第一 從順な者、

第二 威張る者、

第三 猪突漢、

とかう三種で、尙ほ之を細別すれば幾らにも分れる。

從順な者を細別すれば、(第一) 冷靜で從順な者と、(第二) 世話好で柔順な者との二つになる。

威張る者を細別すれば、(第一) 嚴格で威張るのと、世才が有つて威張るのと、二つになる。

さてまた猪突漢を細別すれば、猪突で剽輕な者と、たゞ猪突生一本の者と二つになる。

中にも能くあるのが從順な者で、これは自ら愛敬があつて、人好がして、大抵は溫厚、敬虔、能忍、神意奉行などいふ基督教に至徳とする所のものを具足してゐる、冷靜で從順な者の特色は何事にも動ぜぬ沈着と、假令如何なる憂目を見ても雲烟の眼を過ぐるが如く聊も心に懸けぬ所で、從順で酒を嗜む者の特色は靜かな詩味のある筋に心を寄せて、物に感じ易い所で、從順で世話好きな者の特色は思慮は足ないが、目的もなく熱心で且つ骨惜をせぬ所である。

威張るのは伍長とか軍曹とか乃至砲手長とかいふ重立つた者の中に多い。第一の部類の嚴格で威張る者は誠に氣高く、剛毅で、別して軍人として適當で、而も

高尚な優美な情趣にも乏しめ（伍長のアントーノフの如きは其一人で。此男の事は後段に委しく記するさう）。第二の部類の世才が有つて威張る者は近來日を遂うて殖える模様で、此部類に屬する者は大抵辯才が有つて、讀書位は出来る。いつも桃色の襯衣を着てゐて、衆と一つ鑊の粥を駁らず、他の同輩を大層輕侮に見るけれど、實は兵としては第一の部類に屬する者より劣るのが多い。

猪突漢は威張る者に等しく、第一の部類即ち輕で猪突の者は皆宜しい。特色は極めて快活で辛苦に屈ぬこと、何をさせても頗る器用なこと、天分の厚いこと、勇敢なることなどである。而して矢張第二の部類の方が甚だ宜しくない。これは放埒で猪突な一連で、尤も幸に餘り多くはない、あれば除外して誰も仲間にする者がないのであるが、信仰氣のないこと、罪惡にかけては一種勇往の氣があること、が此の特色である。ウエレンチウクは從順で世話好の部類に屬する。産は小露西亞の者で、もう十五年も兵役に服してゐる。

風采の場らぬ何方かと云へば先づ不器用な兵ではあるが、無邪氣で、順良で、力の入處を間違へはするけれど、極めて熱心で、また極めて正直である。極めて正直といふのは、去年の事、偶然した事件で、彼がその正直の底を叩いて見せた事がある。一體兵は大抵皆職業を持つてゐる。職業の中でも一番流行るのは裁縫と造靴で、ウエレンチウクはその裁縫が出来る、而も砲手長のドロフェイチが服を縫はせる所を見ると、なか／＼出来るに相違ない。去年營内でドロフェイチの誂で薄地の外套を縫はうといふので、羅紗を裁ち、それに合せて裏地をも裁つて、さて其切地を枕に天幕の内で眠に就くと、災難かなや、七ループルもする羅紗が夜の間に紛失した。泪ぐむで唇の色まで變へてビク／＼と顫はせ、今にも泣出しさうな顔をしてウエレンチウクが其事を話すと、ドロフェイチは大に機嫌を損じ、口惜紛におだやかならぬ文句をも云つてはみたが、固より悪人ではなし、それに少しは小金も貯へてゐたものであるから、終には災難と諦らめて別段損害を償はせもし

なかつた。世話好と謂はれるウエレンチウクの事であるから、詮議には手を盡して、災難に逢つた顛末を話しては泣き／＼するのであつたが、如何しても賊は出なかつた。尤もチエルノーフといふ猪突の放蕩が彼と同じ天幕に眠てゐたので、これに大に嫌疑は懸つたものの、確かな證據とでもなかつた。ドロフエイチは世才に長けて兄分と推尊られてはゐるし、小金は有るしするから、隊では頭分の武器掛や工長と何やら悶着があつて、全く外套の事は忘れてゐたが、ウエレンチウクはなか／＼忘れない。其頃は自殺でもしはすまいか、山手へ逃げはすまいかと危ぶまれるほど銷沈で、飲まず、食はず、擰ぎもせずに、唯泣いてばかりゐたが、三日ほど過てドロフエイチの所へ来て、手をわな／＼と顛はしながら、袖口を裏返した間から金貨を摘出して、「今錢と云つちや是だけ外ない、而もジダーノーフに借りたんだ。」と云つて飲拉で、「残のニルブルは稼次第持つて来る、彼畜生（何の畜生だか當人も知らないのであるが）彼畜生のお蔭で、己は悪漢になつた。彼

畜生の驚畜生め、仲間が命から二番目の錢を遣はしやアがつた。己は十五年も勤めてるが云々」で、二ヶ月ほど経つて跡のニルブルも持つて來たが、流石はドロフエイチ、其金は遂に受取らなかつたといふ。

三

ウエレンチウクの外まだ五人ばかりの兵が鐐に當つてゐた。

一番の上位に、風を背負て、隊の砲手長のマクシーモフが樽に腰を掛けて一管の烟を樂むでゐたが、その姿勢なら、眼差なら、動止にも自ら貫目があつて、成程人の上に立つ者と受取られる、況んやその腰を掛けてゐる樽は休憩の時威勢を示す道具となるもので、表は木綿ながら毛裏外套を着てゐたから、愈それに相違ないとなる。

自分が側へ行くと、彼は此方を向いたが、眼は矢張り火を視てゐるので、それが首に連れて此方を向くまでには餘程隙が入らうといふもの。農家の出で、小金を

持つてゐるのみならず、教導旅團で教育を受けたことも有るから、聊か學術の心得もある。これを同輩の兵に云はせると、非常に金持で非常に學者だといふ。それにつけて憶出すのは、或時照準器を以て擲射の演習を執行したことがあつたが、其時マクシーモフは四邊に集まつた兵等に向つて、水平試験器といふものは「即ち空氣的水銀が作用を發表しつゝあるものに外ならぬのである」と云つて説明したこともある。とはいふものゝ決して愚てはない、砲を扱はしても巧である、たゞ變な癖があつて、時々故らに意味の解せぬやうに、恐らく當人にも何の事とも分るまいと思はれるやうに物をいふ。殊に「即ち」と「而して」と此二つの語が好きで、それが出ると、必ず跡は分らなくなる。ところが兵共は反つて其「即ち」を聴くことを喜ぶ。なに聴いたとて意味が分るではないが、何でも其處に甚深の意味が籠つてゐるに違ひない、之を解せぬは此方等が至らぬからとして、益々難有がる。ま、早く云へば、マクシーモフは世才が有つて兄分と推重られる男に違

ひないのである。

籌の側で筋張つた赤い足を出して靴を穿替へてゐる今一人の兵はアントーノフと云つて、三十七年の役に討漏されの兵二人と一門の砲に取附いて、掩護もなしに強敵に抵り、銃丸二つ股に受けながらも、尙ほ砲の側へ去らずに彈込をして、遂に敵を撃退したといふ男である。「若し彼様な人でなかつたなら、疾くの昔砲手長にはなつてゐるんだが」と兵共はいふが、成程妙な男で、素面の時はこれほど沈着で溫順で嚴格な兵もないが、一度酔つたとなると、全く別人のやうになつて、隊長も絲瓜もない、喧嘩をする、亂暴をする、イヤ箸にも棒にも懸らぬ兵となる、まだ一週間にもならぬことであるが、彼は精進前の週間から飲出して、嚇しても嫌してもいつかな歇めず、平生、隊おもひの心も何處へやら遣つて、到頭月曜日まで飲徹し暴徹して、さて精進節になると、全隊に肉食の命令が出てゐたにも拘らず、彼ばかりはビスケットのみを嚙つてゐて、初の一週なぞは定めのウォトカさへ飲まなかつた。さり

ながら一杯機嫌で筋張つた手に三絃琴を把つて何氣なくあらぬ方を顧みつゝ「嬢様」を奏でる時、又は勳章のはた／＼と翩めく外套を羽織り、兩手を淺黄木綿の洋袴の隠袋へ入れて町を通る時、脊低な鐵を叩固めたやうな格好の、脚の短かく曲つた、顔のテカ／＼と光る髭むしや男が、其面に浮べた傲岸の、總て焰硝氣のないものを輕蔑む色を視れば、かうした所へ從卒とか、胡索の歩兵とか、または移住民とかいふ、總て砲兵に縁のない奴が來て無禮な眞似でもすれば勿論、只ほんの其處らを徘徊したばかりでも、こいつは成程喧嘩せずには居られまいと思はれた。おれはかう見えても兵士の手本だと思つてゐるから、慰みにばかりでなく、一番士氣を振作てやらうで、隨分喧嘩もすれば、亂暴もするのである。

耳環を穿めた、髭の剛い、鳥肌の、陶器のパイプを銜へて躊躇むで火に當つてゐる三番目の兵は傳令卒のチキンで、隊で愛敬者といはれるほどあつて例の輕者である。極寒に二日も絶食で、膝まで泥に漬つて行

軍させられる時でも、觀兵式でも、操練でも、毎も妙竹林な面貌、變挺な足取をして滑稽な眞似をするので、全隊擧つて笑倒ける。行軍休憩の時か又は野營でもしてゐる時には、いつもチキンの周圍に若い兵が團集つて來るから、彼は其等を相手に或はフイリカ骨牌遊を企み、或はむかし／＼狡獪い兵があつた話をし、或は英國の貴族の噂をし、或は韃靼人、獨逸人の眞似をし、又はたゞ鬨げた言を云つて人を笑はせる。隊では既う鬨輕者といふ名が通つてゐるから、此男が一寸口を開いて眼をバチつかせれば、もう皆が揃つて笑出すといふほどであるが、成程此男には實際鬨輕な、人の意表に出る才がある。何につけても何かかう變つて、人の氣の附かぬ所を能く見附け出す。それに感心な事には、如何に苦しい場合でも此滑稽の才を失はない。

四番目の兵はまだぶ若い不格好な奴で、去年募られて來た新兵であるが、此度が初陣なのである。籌の直ぐ側で烟の中に立つてゐるから、今にも着てゐる磨切れた半外套に火が移りさうであるけれど、そんな事

は當人一向平氣で、裾をバツと開いて、足を踏擴げて、揚々として悠々として頗る自得する所あるが如くで、さも／＼愉快さうに見える。

さて五番目の最後に控へた、籌を少し離れて、何にするのか類に棒を削つてゐる兵はジダーノフの叔父さんである。隊では一番の古參で、誰も新兵以來の馴染であるといふので、古い癖を其儘に、今だに叔父さん／＼と云つてゐる。噂で聞くと、彼は曾て酒杯を手にした事もなければ、パイプとも親しまず、骨牌遊のナスキーをも剝らず、人に對つて毒口を叩いたこともない。休みの時間には造靴を内職にして、祭日には教會のある地なら屹度禮拜に行くし、なければ家で一文蠟燭を聖像に供へて讚美歌集を繙く。尤もこれより外には何も讀めぬので、兵共とは餘り親しくはない。格が上であれば、假令年下の者にでもわるく慇懃で、同輩とは酒が飲んから一所に遊ぶ折が少ない。その代り新兵や弱年の兵をば殊に愛して、いつも之を庇護て意見もすれば、力にも成つてやる。二十五ルーブルばかり

の小金を持つてゐて、實際困つてゐる者には快く貸して呉れるから、隊では金満家といふことになつてゐる。今は砲手長のマクシーモフの話に、十年ほど前、彼が始めて新兵に入隊した時、聊かばかりの所持金を古參の酒徒共に飲まれて了ひ、困つてゐると、ジダーノフがそれを視て取り、呼付けた上打擲までしての強意見。さて服役中の心得を云聞かせて、もう襦袢もない始末であつたから、襦袢を一枚と錢五十哥呉れて突放したことがある。であるから、ジダーノフの噂をするとマクシーモフはいつも如何にも恩に感じて疎略には思つてゐぬらしい面色をして、「私は全く彼の人のお蔭で人に成つたんだ。」と云ふ。ウェレンチウクも新兵の時から世話になつてゐたが、外套地紛失の時にも急を拯はれた。何しても二十五年も兵で世を渡つたジダーノフの事、これの恩を受けた者はなか／＼多い。職務に掛けては此ほど能く心得てゐる者はなくて、勇敢なことも嚴格なことも均しく群を抜くのである。けれども餘り溫當で風采が揚らんため、十五年も白砲

卒を勤めてゐながら、まだ砲手長にも昇進しない。此にこの男に一つの道樂がある。それは唱歌で、歌になると殆ど夢中になる。中にも取分けて好きなのが幾つもあるが、いつも其心得のある若い兵を集めて、自分は歌へぬ癖に其中に立交り、半外套の隠袋に兩手を入れ、眼を半眼に閉ぢ、頸を振り頸を動かして調子を取る。それが下顎を變化なく動かすので、餘り類のない所作であるが、それを見ると、何故とは知らず自分にはいろ／＼の意が讀まれるのであつた。一寸見れば雪白の頭髮に、青黛を塗つた黒髭、日燦のした黴澤山の顔で、如何にも冷刻な面相に見えるけれど、能々その大きな圓らかな眼に視入ると、殊に其眼に微笑を帯びた時などはおそろしく柔しい殆ど小兒めいた色がふつと見える。此男は曾て口元で微笑したことはない。

四

「チヨツ！ バイブを忘れた。失敗つた事をした！」とウエレンチウクは又繰返した。

「そんならビスケットを喫ふと好い。おりやア家ぢやビスケットばかり喫つてゐるがね、烟草よか甘くつて好いぜ。」と翻弄したのはチキンで、例の口元を歪めて眼をばちつかせるのである。

勿論他の者は笑ひ倒けた。

マクシーモフは大勢の笑ふをば顧視もせず、傲然と位を取りながら、左の掌で烟管を叩き叩き、「そら／＼言はん事か、到頭バイブを忘れて來やアがつた。一體貴様何處へ往つてたんだ？ うむ？」

ウエレンチウクは體を斜に開いて、手を帽へやらうとしたが、これだけは見合せにした。

「大方昨日の酔が醒めんもんで立ながら居睡をやつてたんだらう。だから貴様は長物だと云はれるんだぞ！」

「大丈夫です。若し一滴でも飲んだんなら、毆打つたつて好うがす。本統に僕ア如何したつてンだらう？ 自分にも解らないけど、可愛さうに飲んだんぢやないや……」と口の中で曖昧に云ふ。

「いつでも貴様達のお蔭で己が小言を食ふんだ、それなのに貴様達はいつまでも止めやがらない。仕様がな、い奴等だ。」とマクシーモフの雄辯も此時は既う多少か落着いた調子になつた。

良有つて、ウエレンチウクは頸窩を掻きながら誰に云ふともなく、

「餘程どうも變だ。どうも不思議だ。十六年も勤めてるけど、こんな事ア始てだ。點檢だつていふから、例の通り支度してね、それまでは何ともなかつたが、廠まで行くと、ふつと「一件」に取捉まつちやつた。取捉つて打倒される、もうそれつきりさ……如何して眠つちやつたんだか知らないが、何でも一件が睡たかつたのに違ひないんだね。」

アントーノフは片々の長靴を穿きながら、

「それも無理やりに覺したんだぞ。何程揺ぶつたつて、宛で死人のやうで、些とも感じやがらないんだもの。」
ウエレンチウクが

「はてね。酔つてたんぢやないけどなア……」

チキンが、

「己の方でなア、一遍然ういふことが有つたつけ。或家の神さんだつたがな、燐燐へ上くつて眠やアがつて、二年たつても降らないんだ。それで、全く眠てゐるんだらうと思つて或時覺さうとしたら、既う死んだつてゐたんだ。矢張始終眠むい／＼ツて云つてゐたんだとよ。だから貴様もさうならないやうに用心しろ。」

「チキン、貴様ア賜暇で歸つた時にや、さぞ吹いたらうな？」とマクシーモフが莞爾しながら自分の面を視たところは、如何であります、一つ馬鹿咄をお聴きになつては、といひたさう。

チキンは一寸と自分の面を尻眼にかけて、「なに吹くもんですか！ たゞカフカーズの話をしたただけでさ。」

「何だ／＼、さう含羞むな。まア、話して聞かせろ、如何な鹽梅に威張つたか。」

「威張るも何もありませんがね、」と此話なら珍らしくもないといふ風にチキンは早口に、